



ひろしま国際建築祭 2025
Hiroshima Architecture
Exhibition 2025

ひろしま国際建築祭 2025
開催報告書

目次

P.3	I. 開催概要	P.61	VI. 運営
P.4	事業推進	P.62	会場運営
P.5	概要	P.63	ボランティアスタッフ
P.6	開催趣旨		
P.7	総合テーマ	P.65	VII. 広報・コミュニケーション
P.7	出展建築家・作家	P.66	媒体露出
P.8	出展建築家・作家プロフィール	P.66	新聞・雑誌等の主な報道記事
P.12	公式デザイン	P.68	テレビ・ラジオ出演
		P.69	プレスリリース
P.13	II. 展示	P.69	記者発表会
P.14	展示会場	P.70	メディアツアー
P.20	展示内容	P.71	広報用制作物
P.30	移動型キオスクー小さな建築プロジェクト	P.72	連携活動（行政）
		P.73	連携活動（民間）
P.33	III. オープンングレセプション・イベント・ワークショップ	P.74	他の芸術祭との連携
P.34	オープンングレセプション	P.74	公式ウェブサイト
P.34	トークイベント	P.74	公式 SNS
P.37	ワークショップ		
P.40	特別応援プログラム	P.75	VIII. 来場者の状況
P.43	連携イベント	P.76	来場者数
		P.77	来場者アンケート
P.49	IV. 鑑賞パスポート・チケット		
P.50	券種・料金	P.83	IX. 経済波及効果
P.51	販売期間	P.84	推計結果
P.51	販売箇所		
P.53	ハンドアウト	P.85	X. 後援・助成・協賛等の支援
		P.86	後援
P.55	V. 公式グッズ・クラウドファンディング・ふるさと納税・スポンサー協賛	P.86	助成
P.56	公式グッズ	P.87	協賛
P.57	オフィシャルブック	P.88	後援・助成団体名、協賛企業名の掲出
P.58	クラウドファンディング	P.94	特別協賛・特別協力・協力
P.58	ふるさと納税	P.94	謝辞
P.59	スポンサー協賛	P.95	XI. 主催団体
		P.96	概要
		P.96	役員

I. 開催概要

2025年10月4日(土)から11月30日(日)までの58日間、
広島県福山市・尾道市の7会場を中心に、
「つなぐ——「建築」で感じる私たちの“新しい未来”」
(英語名: Architecture: A New Stance for Tomorrow)を
総合テーマに掲げた、建築文化を発信する建築祭を開催し、
期間中、延べ約21万4千人が来場した。

ひろしま国際建築祭 2025

Hiroshima Architecture Exhibition 2025

事業推進

○ 一般財団法人神原・ツネイシ文化財団（広島県福山市）が主催となり、文化庁（国）、広島県・福山市・尾道市（自治体）、一般社団法人せとうち観光推進機構・一般社団法人広島県観光連盟（観光関連団体）、広島商工会議所・福山商工会議所・尾道商工会議所（経済団体）、一般社団法人日本建築学会・一般社団法人日本建築協会・公益社団法人日本建築家協会・公益社団法人日本建築士会連合会・一般社団法人日本建築士事務所協会連合会・一般社団法人日本建築設計学会（建築関連団体）、中国新聞社（報道）の後援により、事業を推進した。

○ 出展建築家・作家の選定は総合テーマを鑑み、総合ディレクター白井良邦とチーフキュレーター前田尚武を中心に行った。日本が国別で見ると、建築界のノーベル賞と言われる「プリツカー建築賞」受賞者がアメリカと並び世界最多受賞国であることから、日本人建築家を中心とした選定となった。

○ 展示会場やイベント会場は街の中に分散させ、来場者・参加者が展示だけではなく街歩き自体も展示の一部として楽しめるように工夫した。いくつかの展示会場に関しては、建築祭が無ければ普段足を運ばないような場所に設定し、来場者・参加者が福山・尾道の魅力ある風景・食・街並みなどに、建築祭が開催されたことで出会うという「体験」ができるよう計画した。

○ 建築祭期間中には展示に加え、トークイベントが開催され、若手建築家からプリツカー建築賞受賞の巨匠まで多くの建築家が福山・尾道を訪れ講演等を行った。福山市内は広島県立歴史博物館講堂、ふくやま美術館ホール、iti SETOUCHI コワーキングスペース、神勝寺 禅と庭のミュージアムなど、尾道市内は松翠園大広間、ONOMICHI U2、LLOVE HOUSE ONOMICHIなどを会場に実施した。

○ 建築祭期間中には展示だけではなく、参加型のイベント「ワークショップ」を多数行った。特に力を入れたのは子ども向け、または親子で参加できるワークショップで、参加費は無料とし、鉋掛けやのこぎりで木を切るなどの大工体験や、寺の境内を歩き回り植物や落ち葉を集めるなど、身体を動かしながら行うイベントを重視し企画した。地域への理解や建築文化の浸透など、小学生を中心とした子どもたちとその親世代に向けてのアプローチを積極的に行い、感性を育む取り組みを実施した。

概要

名称：ひろしま国際建築祭 2025

会期：2025年10月4日（土）～11月30日（日）[58日間]

総合テーマ：つなぐ——「建築」で感じる、私たちの“新しい未来”
Architecture: A New Stance for Tomorrow

展示会場：福山市内 / 神勝寺 禅と庭のミュージアム、ふくやま美術館 ギャラリー、JR 福山駅南口（移動型キオスクー小さな建築プロジェクト）
尾道市内 / 尾道市立美術館、まちなか文化交流館「Bank」、LLOVE HOUSE ONOMICHI、ONOMICHI U2、LOG、ONOMICHI U2 前オリープ広場（移動型キオスクー小さな建築プロジェクト）

出展建築家・作家：23組

主催：一般財団法人神原・ツネイシ文化財団
総合ディレクター：白井良邦
チーフキュレーター：前田尚武

後援：文化庁
広島県
福山市
尾道市
一般社団法人せとうち観光推進機構
一般社団法人広島県観光連盟（HIT）
広島商工会議所
福山商工会議所
尾道商工会議所
一般社団法人日本建築学会
一般社団法人日本建築協会
公益社団法人日本建築家協会
公益社団法人日本建築士会連合会
一般社団法人日本建築士事務所協会連合会
一般社団法人日本建築設計学会
中国新聞社

助成：公益財団法人 大林財団

メディアパートナー：designboom
Dezeen

開催趣旨

〈ひろしま国際建築祭〉は、「建築」で未来の街をつくり、子どもの感性を磨き、地域を活性化させ、地域の“名建築”を未来に残すことをミッションとして掲げ、3年に一度開催する建築文化を発信する祭典です。

世界を舞台に活躍する巨匠から未来を担う若手建築家まで。彼らのドローイングや模型、動画の展示や特別なインスタレーションを通じ、建築文化を切り口に、私たちの未来社会と一緒に考えてみたいと思います。トークショーや文化財指定の古建築・通常非公開の建築物などのオープンアーキテクチャー、地元の子どもたちを招いての建築鑑賞やワークショップなど、多様なプログラムを計画しています。

巨大な内海に面した瀬戸内地域では古来、風土や景観、伝統に呼応した名建築の数々が生まれてきました。その背景には、日本が国家として形づくられた遣隋使・遣唐使の時代から近世の朝鮮通信使・北前船にいたるまで、広島県の位置する瀬戸内海が“文化・物流の大動脈”だったことが理由としてあります。日本はこの瀬戸内海を通じ、海外から人や文化を招き入れ、あるいは発信し、この海を通じ文化交流を行ってきました。古建築はもとより、自然と文化が築いてきた瀬戸内地域特有の磁力に吸い寄せられるように丹下健三、槇文彦、安藤忠雄、伊東豊雄、SANAA、坂 茂といった現代の建築家たちも挑戦的で実験的な名作を次々と生み出しています。それゆえに瀬戸内地域は古建築から現代建築まで「建築文化の集積地」として貴重な建築の宝庫となっています。

“文化・物流の大動脈”であった瀬戸内海の周辺地域は“つなぐ”ことを鍵にその礎を築いてきたといえます。『ひろしま国際建築祭 2025』は、「つなぐ——「建築」で感じる、私たちの“新しい未来” / Architecture: A New Stance for Tomorrow」をテーマに、歴史、風土、景観、技術、思想などさまざまな視点から「建築」に触れ、考え、交わる機会をつくり、ここ瀬戸内で建築文化を感じることから、みなさんと“新しい未来”像を考えるきっかけになればと願っています。

総合テーマ

つなぐ——「建築」で感じる、私たちの“新しい未来”

Architecture: A New Stance for Tomorrow

『ひろしま国際建築祭 2025』は、「つなぐ——「建築」で感じる、私たちの“新しい未来” Architecture: A New Stance for Tomorrow」をテーマに、歴史、風土、景観、技術、思想などさまざまな視点から「建築」に触れ、考え、交わる機会をつくります。

地球規模で発生する自然災害や、戦争とそれに伴う難民問題、そして環境破壊——。21世紀に入って四半世紀経った今も、私たちは様々な問題に直面し、不安を感じながら日常生活を送っています。またここ日本では少子化・高齢化が進み、経済の停滞や無秩序な開発で街の風景が変わり、活気が失われつつあります。私たちはそのような状況のなかで、問題にどう向き合い、課題を解決していくべきでしょうか？

「建築」は単に建物や街づくりを指すものではありません。それは文化を生み・育み、私たちの生活をより豊かにしながら未来をつくっていくための「知恵」のひとつです。建築祭を通じ、ここ瀬戸内で建築文化を感じることから、みなさんと“新しい未来”像を探りたいと考えています。

出展建築家・作家

安藤忠雄

石上純也

磯崎新*

伊東豊雄

川島範久

高野ユリカ

妹島和世 (SANAA)

丹下健三*

長坂常

中山英之

西沢立衛 (SANAA)

坂 茂

藤井厚二*

藤本壮介

堀部安嗣

前田圭介

槇文彦*

山本理顕

VUILD / 秋吉浩気

Clouds Architecture Office

けんちくセンター CoAK

スタジオ・ムンバイ / ビジョイ・ジェイン

UMA / design farm

(以上、五十音順・*故人)

出展建築家・作家プロフィール

安藤忠雄 TADAO ANDO 建築家



撮影： 岡野欣次

1941年、大阪生まれ。安藤忠雄の大きな功績のひとつは、「コンクリート」という世界中どこでも手に入る汎用性の高い建築土木用資材を用い、大理石のように美しい素材として広く世間に広めたことだろう。彼はコンクリートを用いて生み出した空間に、巧みに自然光を取り入れ、住宅であっても、そこが神殿のような崇高な建築に昇華させている。また彼の人柄と作品に心底惚れる施主も多く、安藤と何年にも渡り、プロジェクトを伴奏していくクライアントが多いのも特徴だ。例えば、瀬戸内海に浮かぶアートの聖地として知られる「直島」でのベネッセの福武聡一郎との関係。1992年完成の〈ベネッセハウスミュージアム〉から始まり、2025年開館の〈直島新美術館〉まで、30年以上に渡り共にプロジェクトを進めてきた。海外ではケリング・グループのフランソワ・ピノーとのタッグが知られる。未完に終わったバリ・スガン島の美術館計画（2001年）から、イタリア・ヴェニスでの〈パラッツォ・グラッシ>（2006年開館）や<プンタ・デラ・ドガーナ>（2009年開館）、そしてバリの<ブルス・デ・コムルス〉（2021年完成）まで、共に美術館をつくり続けてきた。

石上純也 JUNYA ISHIGAMI 建築家



© CHIKASHI SUZUKI

1974年生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科建築専攻修士課程修了後、妹島和世建築設計事務所を経て、2004年石上純也建築設計事務所を設立。主な作品に、神奈川工科大学 KAIT 工房・KAIT 広場、Park Groot Vijversburg ビジターセンター、水庭、2019年サーペンタインパヴィリオン、House & Restaurant、水の美術館など。2009年日本建築学会賞（作品）、2010年第12回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展金獅子賞、毎日デザイン賞、2019年芸術選奨文部科学大臣新人賞（美術部門）、OBEL AWARD、2024年フレデリック・キースラー建築芸術賞、2024年日本建築学会賞（作品）など受賞多数。https://jnyi.jp/

磯崎新 ARATA ISOZAKI 建築家



写真提供：

Arata Isozaki & Associates

1931年、大分市生まれ。1954年東京大学工学部建築学科卒業。1963年磯崎新アトリエを設立。以後、国際的な建築家として、群馬県立近代美術館、ロサンゼルス現代美術館、パルセロナオリンピック競技場などを設計。近年では、カタール国立コンベンションセンター、ミラノアリアンツタワー、上海シンフォニーホール、湖南省博物館、中央アジア大学、中国河南省鄭州市の都市計画などを手がけた。世界各地の建築展、美術展のキュレーションや、コンペティションの審査委員、シンポジウムの議長を務めた。代表的な企画・キュレーションに「間－日本の時空間」展（1978-81）、ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展日本館コミッション（第6回～8回）、同展日本館展示「亀裂」で金獅子賞受賞（1996）、建築思想の国際会議「ANY会議」を10年に渡り企画（1991-2000）。著書に『建築における「日本的なもの』』（新潮社、MIT Press）、過去50年間に渡り書いてきた文章を編集した『磯崎新建築論集』（全8巻、岩波書店）など多数。建築のみならず、思想、美術、デザイン、文化論、批評など多岐にわたる領域で活躍。2019年「プリツカー賞」受賞。2022年没。　https://isozaki.co.jp/

伊東豊雄 TOYO ITO 建築家



撮影： 藤塚光政

1941年生まれ。65年東京大学工学部建築学科卒業。主な作品に「せんだいメディアテーク」、「多摩美術大学図書館（八王子キャンパス）」、「みんなの森 ぎふメディアコスモス」、「台中国家歌劇院」（台湾）など。近作に「水戸市民会館」、「茨木市文化・子育て複合施設 おにクル」「EXPOホール2025」などがある。現在、「国家児童未来館」（台湾）などが進行中。日本建築学会賞（作品賞、大賞）、ヴェネチア・ビエンナーレ金獅子賞、王立英国建築家協会（RIBA）ロイヤルゴールドメダル、高松宮殿下記念世界文化賞、プリツカー建築賞、UIAゴールドメダルなど受賞。2011年に私塾「伊東建築塾」を設立。これからのまちや建築を考える場として様々な活動を行っている。また、自身のミュージアムが建つ愛媛県今治市大三島においては、塾生有志や地域の人々とともに継続的なまちづくりの活動に取り組んでいる。　http://www.toyo-ito.co.jp/

川島範久 NORIHISA KAWASHIMA 建築家



1982年、神奈川県生まれ。2005年東京大学工学部建築学科卒業。2007年東京大学大学院修士課程修了。2007～2014年日建設計。2012年UCパークレー客員研究員。2014～2020年東京工業大学助教。2016年東京大学大学院博士課程修了、博士（工学）取得。2017年川島範久建築設計事務所設立。現在、明治大学准教授、川島範久建築設計事務所代表。「自然とつながる建築」をめざして、デザインの実践と研究に取り組んでいる。2014年「NBF大崎ビル(旧ソニーシティ大崎)」にて日本建築学会賞（作品）、2024年「GOOD CYCLE BUILDING 001」にて日本建築学会作品選奨を受賞。主著に『環境シミュレーション建築デザイン実践ガイドブック 自然とつながる建築をめざして』（彰国社、2022年）。　http://norihisakawashima.jp/

高野ユリカ YURIKA KONO 写真家



1987年、新潟県生まれ。土地や歴史、建築や空間、個人の物語のリサーチから着想し、大文字の歴史:history: his-storyに回答する her-story や、歴史に残ってこなかった無名の人々への想像をテーマに作品を制作している。主な個展に「REGARDING THE ECHO OF OTHERS」（横浜市民ギャラリー、2023）、「秋の日記」（日比谷図書文化館特別展示室、2024）など。　https://www.yurikakono.com/

妹島和世 KAZUYO SEJIMA 建築家



©SANAA

1956年生まれ。1981年日本女子大学大学院修了。1987年妹島和世建築設計事務所設立。1995年西沢立衛とSANAA設立。現在、ミラノ工科大学教授、日本女子大学客員教授、大阪芸術大学客員教授、横浜国立大学名誉教授、東京都庭園美術館長。主な妹島和世建築設計事務所の作品に再春館製薬所女子寮、梅林の家、犬島「家プロジェクト」、すみだ北斎美術館、日本女子大学目白キャンパスがある。SANAA/2004年ヴェネチアビエンナーレ国際建築展 金獅子賞、2010年プリツカー賞、2022年高松宮殿下記念世界文化賞建築部門など数多くの賞を受賞。主な作品に、金沢 21世紀美術館、ニューミュージアム（アメリカ）、Rolex ラーニングセンター（スイス）、ルーヴル・ランス（フランス）、グレイス・ファームズ（アメリカ）、荘銀タクト鶴岡、日立市新庁舎、ポッコロニ大学新キャンパス（イタリア）、ラ・サマリテース（フランス）、シドニー・モダン・プロジェクト（オーストラリア）など。http://www.sanaa.co.jp/

丹下健三 KENZO TANGE 建築家



撮影： 齋藤康一

1913年、大阪府生まれ。1938年、東京帝国大学工学部建築科を卒業、ル・コルビュジェの教え子である前川國男建築事務所に入る。1941年、東京大学大学院に入学、卒業後、1946年から1974年まで母校で教鞭をとり、「丹下研究室」を主宰。横文彦、磯崎新、黒川紀章、谷口吉生ら多くの優れた人材を育成するとともに、ミラノ工科大学、ハーバード大学、清華大学など世界各国で教育に携わる。初期の代表作である広島平和資料館、香川県庁舎、代々木国立屋内総合競技場は国の重要文化財に指定されている。その他、国内では東京カテドラル聖マリア大聖堂、東京都庁舎、フジテレビ本社ビルなど、また海外ではUOBプラザ（Singapore）、国家国王宮殿（Saudi Arabia）、グランテ克蘭（France）、ナイジェリア新都心計画（Nigeria）、アメリカ医師会本部ビル（USA）など、数多くの作品に携わる。プリツカー賞をはじめ、フランス建築アカデミー、イギリス王立建築家協会、アメリカ建築家協会の各ゴールドメダル、ブルー・ル・メリット勲章（西ドイツ）、文化勲章（日本）、レジオン・ドヌール勲章（フランス）を受賞し、アカデミーフランセーズ正会員（フランス）にも選出されている。2005年3月没。https://www.tangeweb.com/

長坂常 JO NAGASAKA 建築家



撮影： 藤塚光政

1971年生まれ。1998年東京藝術大学卒業後にスタジオを立ち上げ、現在は千駄ヶ谷にオフィスを構える。家具から建築、そして町づくりまでスケールも様々、そしてジャンルも幅広く、住宅からカフェ、ショップ、ホテル、銭湯などなどを手掛ける。どのサイズにおいても1／1を意識し、素材から探求し設計を行い、国内外で活動の場を広げる。日常にあるもの、既存の環境のなから新しい視点や価値観を見出し「引き算」「誤用」「知の更新」「見えない開発」「半建築」など独特な考え方を提示し、独自の建築家像を打ち立てる。代表作に Sayama Flat / 奥沢の家 / FLAT TABLE / ColoRing / LLOVE / Aesop / BLUE BOTTLE COFFEE / 桑原商店 / DESCENTE BLANC / HAY / 武蔵野美術大学 16 号館 / 黄金湯 / DOKUBO + EL AMIGO /D&DEPARTMENT JEJU など。https://schemata.jp/

中山英之 NAKAYAMA HIDEYUKI 建築家



©Takashi Kato

1972年、福岡県生まれ。1998年、東京藝術大学美術学部建築科卒業。2000年、東京藝術大学大学院美術研究科建築専攻修士課程修了。2000-2007年、伊東豊雄建築設計事務所勤務。2007年、中山英之建築設計事務所設立。2024年 - 東京藝術大学美術学部建築科教授。代表作に「石の島の石」「弦と弧」「mitosaya 薬草園蒸留所」などがあり、ブルワリー施設やレストラン、店舗、公共施設、オフィス、住宅など幅広い用途の設計を手掛けている。主な賞歴にSD Review 2004 鹿島賞、第17回環境・設備デザイン賞 優秀賞、グッドデザイン賞金賞がある。主な著書に『中山英之 | スケッチング』『中山英之 | 1/100000000』『建築のそれからにまつわる 5本の映画,and then: 5 films of 5 architectures』がある。http://www.hideyukinakayama.com

西沢立衛 RYUE NISHIZAWA 建築家



©SANAA

1966年生まれ。1990年横浜国立大学大学院修了。妹島和世建築設計事務所を経て1995年妹島和世とSANAA設立。1997年西沢立衛建築設計事務所設立。現在、横浜国立大学大学院 Y-GSA 教授。主な西沢立衛建築設計事務所の作品に森山邸、House A、十和田市現代美術館、豊島美術館、軽井沢千住博美術館がある。SANAA/2004年ヴェネチアビエンナーレ国際建築展 金獅子賞、2010年プリツカー賞、2022年高松宮殿下記念世界文化賞建築部門など数多くの賞を受賞。主な作品に、金沢 21世紀美術館、ニューミュージアム（アメリカ）、Rolex ラーニングセンター（スイス）、ルーヴル・ランス（フランス）、グレイス・ファームズ（アメリカ）、荘銀タクト鶴岡、日立市新庁舎、ポッコロニ大学新キャンパス（イタリア）、ラ・サマリテース（フランス）、シドニー・モダン・プロジェクト（オーストラリア）など。http://www.sanaa.co.jp/

坂茂 SHIGERU BAN 建築家



1957年、東京都生まれ。クーパー・ユニオン建築学部（NY）で建築を学び、東京、パリ、ニューヨークに事務所を構える。紙管を使った建築や、木材を使った革新的な構造で知られている。代表作はポンピドゥー・センター・メス（2010年）、紙の大聖堂（2013年）、大分県立美術館（2014年）、ラ・セーン・ミュージカル（2017年）、静岡県富士山世界遺産センター（2017年）、SIMOSE（2023年）、豊田市博物館（2024年）。1995年にNGO「Voluntary Architects' Network（VAN）」を設立し、世界各地での災害支援に数多く貢献したことから、プリツカー建築賞（2014年）、マザー・テレサ社会正義賞（2017年）、アストゥリアス皇太子賞平和部門（2022年）、高松宮殿下記念世界文化賞 建築部門（2024）を受賞。現在、芝浦工業大学特別招聘教授。https://shigerubanarchitects.com/ja/

開催概要

参加者

開催地

開催日時

藤井厚二 KOJI FUJII 建築家

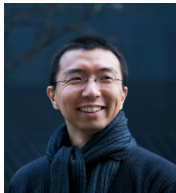


1888年生まれ。実家は現在の広島県福山市にあった十数代続く「くろがねや」と言われる商家で造酒屋、製塩業、金融業を営んでいた。藤井はその次男として生まれる。1913年、東京帝国大学工科大学建築学科卒業。同年、竹中工務店入社。朝日新聞大阪本社（1916年竣工）などの設計を担当する。1919年、竹中工務店退社。同年、アメリカ、イギリス、フランスなど私費で約10か月間の視察旅行に出かける。帰国後の1920年12月に京都帝国大学工学部講師に就任、京都大山崎に住宅を完成させ移り住む。翌21年、同大学助教授、1926年に教授に就任。1928年、聴竹居竣工。1937年、直腸がんが発覚。1938年、逝去。享年49歳。

撮影：Tetsuya Ito

参加者

藤本壮介 SOU FUJIMOTO 建築家



撮影：David Vintimer

1971年、北海道生まれ。東京大学工学部建築学科卒業後、2000年藤本社介建築設計事務所を設立。2014年フランス・モンペリエ国際設計競技最優秀賞（ラルブル・プラン）に続き、2015、2017、2018年にもヨーロッパ各国の国際設計競技にて最優秀賞を受賞。国内では、2025年日本国際博覧会の会場デザインプロデューサーに就任。2024年には「(仮称)国際センター駅北地区複合施設基本設計業務委託」の基本設計者に特定。主な作品に、ブダペストのHouse of Music (2021年)、マルホンまきあーとテラス 石巻市複合文化施設（2021年）、白井屋ホテル（2020年）、L'Arbre Blanc (2019年)、ロンドンのサーペンタイン・ギャラリー・パビリオン 2013 (2013年)、House NA (2011年)、武蔵野美術大学 美術館・図書館 (2010年)、House N (2008年) 等がある。https://www.sou-fujimoto.net/



撮影：David Vintimer

堀部安嗣 YASUSHI HORIBE 建築家

1967年、神奈川県横浜市生まれ。1990年、筑波大学芸術専門学群環境デザインコース卒業。1991-1994年、益子アトリエにて益子義弘に師事。1994年、堀部安嗣建築設計事務所を設立。2002年、第18回吉岡賞を《牛久のギャラリー》で受賞。2007-2024年、京都造形芸術大学（2020年4月より、京都芸術大学に校名変更）大学院教授。2016年、日本建築学会賞（作品）を《竹林寺納骨堂》で受賞。2020年 毎日デザイン賞を《立ち去りがたい建築》で受賞。2022年 - 放送大学教授。https://horibe-aa.jp



©Tetsuya Ito

前田圭介 KEISUKE MAEDA 建築家



© 藤塚光政

1974年、広島県福山市生まれ。2003年UID設立。故郷「広島県福山市」を拠点に国内外でインターローカルな設計活動を行い、建築・庭・街といった内外の境界を一体的に捉えた空間を探索している。福山市内では『ホロコースト記念館』にてDedalo Minosse 2007 /2008 国際建築賞 Under40 グランプリ（イタリア）、こどもえんつくし乳児棟『Peanuts』にて2012年こども環境学会賞 デザイン賞、2013年日事連建築賞 国土交通大臣賞。『福山本通・船町商店街アーケード 改修プロジェクト - とおり町 Street garden-』にてグッドデザイン賞 2017 グッドデザイン金賞（経済産業大臣賞）。『santo』にて2024年日本建築学会作品選奨を受賞。その他、第11回 ARCASIA 建築賞 ゴールドメダル (Asia)、第24回 JIA 新人賞、Design Vanguard 2014 選出（米国）、AR House 2016 Winner（英国）など受賞。https://maeda-inc.jp/



© 藤塚光政

槇文彦 FUMIHIKO MAKI 建築家



撮影：Peter Hyatt

1928年、東京都生まれ。1952年に東京大学工学部建築学科を卒業し、アメリカのクランブルック美術学院及びハーバード大学大学院の修士課程を修了。その後、SOM、セルト・ジャクソン建築設計事務所、ワシントン大学のキャンパス・プランニング・オフィスに勤務した。ワシントン大学とハーバード大学で都市デザインの準教授も務め、1965年に帰国、株式会社槇総合計画事務所を設立。設計活動の傍ら東京大学教授を務め、1979年から1989年まで教壇に立った。国内外で数々の賞に輝くなど高い評価を得た。主な受賞は、イスラエルのウルフ基金賞（1988）、トーマス・ジェファーソン建築賞（1990）、国際建築家連合（UIA）ゴールドメダル（1993）ハーバード大学からプリンス・オブ・ウェールズ都市デザイン賞（1993）、アーノルド・プルンナー記念建築賞（1999）、高松宮殿下記念世界文化賞建築部門受賞（1999）、AIA アメリカ建築家協会ゴールドメダル（2011）。最も建築家にとって名誉あるプリツカー賞を1993年に受賞した。2024年に世界したが、世界中の建築界と建築論に影響を与え続けるレガシーを残した。https://www.maki-and-associates.co.jp/



撮影：Peter Hyatt

山本理顕 RIKEN YAMAMOTO 建築家



©Tom Welsh for The Hyatt Foundation Pritzker Architecture Prize

1945年、北京生まれ。日本大学理工学部建築学科卒業、東京藝術大学大学院美術研究科建築専攻修了、東京大学生産技術研究所原広司研究室研究生。2007-2011年、横浜国立大学大学院教授、2018-2022年、名古屋造形大学学長、2022-2024年、東京藝術大学客員教授、2024年より神奈川大学客員教授、横浜国立大学名誉教授・名誉博士。主な作品にGAZEBO、埼玉県立大学、公立はこだて未来大学、横須賀美術館、The CIRCLE チューリッヒ国際空港、名古屋造形大学など。桃園、天津、北京、ソウルなどでも複合施設、公共建築、集合住宅などを手掛ける。主な著書に『新編 住居論』（平凡社）、『地域社会圏主義』（TWO VIRGINS）、『権力の空間 / 空間の権力』（講談社）、『都市美』（河出書房新社）、『山川さんの山川山荘』（TWO VIRGINS）、山本理顕 コミュニティーと建築』（平凡社）など。2001年「第57回日本芸術院賞」、2024年度プリツカー賞、文化庁長官表彰（国際芸術部門）受賞。https://www.riken-yamamoto.co.jp/

開催概要

参加者

開催地

開催日時

スタジオ・ムンバイ / ビジョイ・ジェイン STUDIO MUMBAI / BIJOY JAIN 建築家



撮影：Tetsuya Ito

1965年、インドのムンバイ生まれ。ロサンゼルスとロンドンで実務経験後、1995年にインドに戻り、スタジオ・ムンバイを設立。現在、スイスのメンドリシオにある建築アカデミーで教鞭をとっている。また、イエール大学やデンマーク王立芸術建築アカデミーでも客員教授として教鞭をとっている。2015年、建築界への貢献が認められ、ベルギーのハッセルト大学から名誉博士号を授与された。2017年にはRIBA(王立英国建築家協会)からインターナショナル・フェローシップを授与された。2018年、インド国外初の建築プロジェクトとして尾道の多目的スペース「LOG」がオープン。スタジオ・ムンバイの作品は、アート、建築、マテリアルの境界を探索している。スタジオは学際的なグループとして運営され、反復的なプロセスから生み出される環境を共有している。ここでは、プロセスや時間を表現に不可欠な要素としてアイデアを探索し、水、空気、光は作品の合成におけるすべての物質性の基礎となっている。

https://www.studiomumbai.com/

参加者

Clouds Architecture Office 建築家



©GION

Clouds Architecture Office は建築設計・アート・リサーチ分野の幅広い知見を統合する創造性に焦点をあてた活動を目的として、曾野正之（1970年生まれ）とオスタッフ・ルダケヴィッチ（1973年生まれ）によりニューヨークで2010年設立。2015年曾野祐子参加。理念と実体験の交点を探る環境の知覚体験を根幹に置く設計手法により多様なプロジェクトを提案し、これまでに住宅・公共施設からパブリックアートや宇宙建築に至る幅広い設計に携わる。Clouds AO(クラウド・アオ)の設計過程における特徴は、必要なプログラムに対する徹底したリサーチ及び多面的なデザイン・スタディを通じ最良の解法を導くプロセス重視のアプローチにある。2015年、NASA 火星基地設計コンペ優勝、同コンセプトのNASA との共同設計を開始。2018年 ANA と JAXA による宇宙開発実証実験施設「AVATAR X LAB」を発表。2022年には福岡の複合施設「010 BUILDING」を手がけた。現在ウクライナでの3D プリントによる復興支援プロジェクトを Serendix、国連工業開発機関と共に進行中。 https://cloudsao.com/

参加者

けんちくセンター CoAK Centre for Co-Architecture Kyoto 建築プラットフォーム



2023年、現代社会における多様化した建築文化をキュレーションするためのプラットフォーム「一般社団法人けんちくセンター CoAK（Centre for Co-Architecture Kyoto）」として川勝真一（1983年生まれ）が設立。2024年、京都市内に「けんちくセンター CoAK」をオープン。展覧会、ワークショップなどのイベントの開催のほか、建築案内やツアーコーディネート、地域コミュニティに向けた建築相談・技術サポートを実施。これらの取り組みを通じて、CoAK は建築分野における現代的な実践に対する一般の人々の理解を深め、対話を促進することを目指している。https://centrecoak.org

参加者

開催地

UMA/design farm デザインスタジオ



2007年、原田祐馬により設立。大阪を拠点に文化や福祉、地域に関わるプロジェクトを中心に、グラフィック、空間、展覧会や企画開発などを通して、理念を可視化し、新しい体験をつくりだすことを目指している。「ともに考え、ともにつくる」を大切に、対話と実験を繰り返すサステナブルなデザインを実践。現在のメンバーは、原田祐馬、山副佳祐、西野亮介、津田祐果、平川かな江、高橋めぐみ、大隅葉月、白川温未の8人。受賞歴はグッドデザイン賞 2016・金賞、日本サインデザイン賞最優秀賞、日本タイポグラフィ年鑑ベストワーク、CS デザイン賞準グランプリなど。https://umamu.jp/



撮影：Tetsuya Ito

VUILD/ 秋吉浩気 KOKI AKIYOSHI 建築家



1988年、大阪府生まれ。芝浦工業大学工学部建築学科卒業後、慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科政策・メディア専攻 X-design 領域にてデジタルファブ리케이션を専攻。2017年に建築テック系スタートアップVUILDを創業し、「建築の民主化」を目指す。デジタルファブ리케이션やソーシャルデザインなど、モノからコトまで幅広いデザイン領域をカバーする。主な受賞歴に Under 35 Architects exhibition Gold Medal 賞 (2019)、グッドデザイン金賞 (2020)、Archi-Neering Design AWARD 最優秀賞 (2022,2024)、みんなの建築大賞大賞 (2024)。著書に『メタアーキテクトー次世代のための建築』（スベルプラーツ出版刊 2022年）、『建築家の解体』（VUILD BOOKS 刊 2022年）。https://vuild.co.jp/

公式デザイン

戦後 80 年という節目の年に行われる『ひろしま国際建築祭 2025』では、焼け野原から「建築」の力も借りて復興を遂げてきた日本の姿と、平和の象徴でもある建築家・丹下健三の「広島平和会館原爆記念陳列館（現・広島平和記念資料館本館）」の写真を基軸に、過去・現在・未来という 3 つの時間を建築で「つなぐ」構成になっている。

「過去」のイメージは写真家・石元泰博が撮影した「広島平和会館原爆記念陳列館」のモノクローム写真を用い、「現在」の姿は尾道のホテル LOG の写真を、「未来」のビジョンを表すヴィジュアルには 2015 年に NASA が主催した火星居住コンペ 1 等に輝いた NY 拠点の建築ファーム Clouds Architecture Office の CG を用い展開した。

シンボルマーク、ロゴタイプデザインは原研哉、メインヴィジュアルデザインは UMA / design farm が担当している。



シンボルマーク、ロゴタイプデザイン：原研哉



メインヴィジュアルデザイン：UMA/design farm

写真左 / Yasuhiro Ishimoto, Hiroshima Peace Center (Kenzo Tange), c.1954,
The Museum of Art, Kochi © Kochi Prefecture, Ishimoto Yasuhiro Photo Center
写真中央 / Studio Mumbai 「LOG」 © Ken'ichi Suzuki
写真右 / Clouds Architecture Office / Space Exploration Architecture 「Mars Ice House」 © Clouds Architecture Office / SEArch +

II. 展示

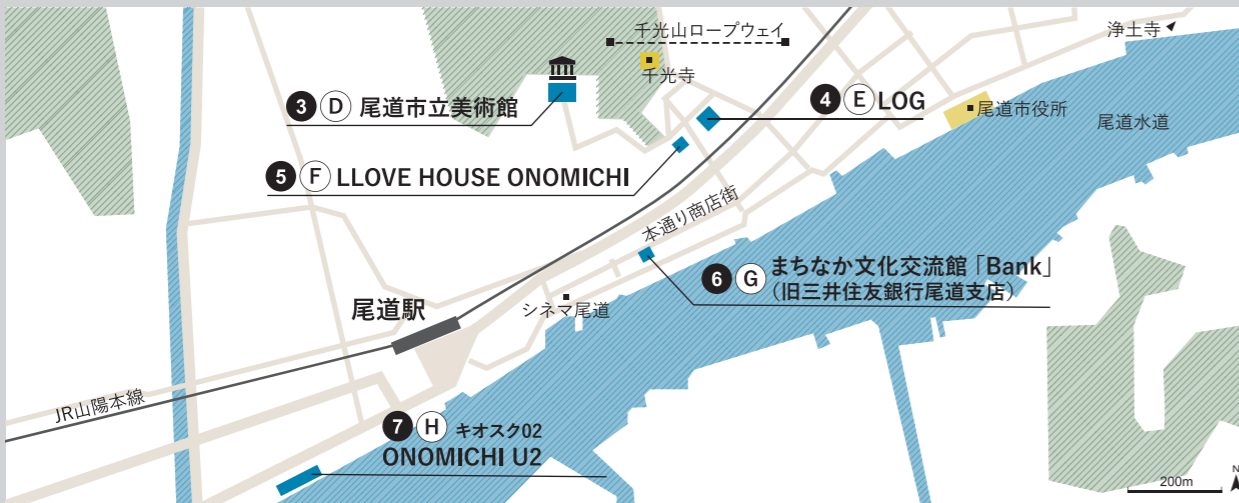
『ひろしま国際建築祭 2025』は、広島県福山市・尾道市を舞台に開催され、7つの会場で、8つの展示を行った。またその展示自体とは別に、「移動型キオスクー小さな建築プロジェクト」として、JR 福山駅南口、〈ONOMICHI U2〉前のオリーブ広場、〈神勝寺 禅と庭のミュージアム〉の枯山水庭園に、著名建築家の設計による合計3つの小さな建築をつくり、それぞれインフォメーションセンターやワークショップの展示拠点、飲み物を販売するスタンドとして展示・活用した。

展示会場

福山市内で2か所、尾道市内で5か所の合計7つの会場で展示を行った。この2市にまたがる複数会場を周遊するうえで拠点となるのがJR福山駅であることから、駅南口に建築家・石上純也氏設計のキオスクを設置し、そこをインフォメーションセンターとして情報発信や来訪者の交流を促した。

福山市の会場はJR福山駅から徒歩で気軽にアクセスできる福山城公園内の〈ふくやま美術館 ギャラリー〉と、車で約30分を要し公共交通機関ではアクセスが困難ではあるが、他の地域にはない特色・特別感のある〈神勝寺 禅と庭のミュージアム〉とした。

尾道市内の会場は〈尾道市立美術館〉を中心に、山側・商店街・海側を徒歩で周遊できるよう設定し、街を回遊し偶然の出会いや発見を促すとともに、旅情をそそることを意識して設定された。



① 神勝寺 禅と庭のミュージアム(福山市)

天心山神勝寺は、臨済宗建仁寺派の特例地寺院で、その敷地は7万坪にも及ぶ。そもそもは海難事故で亡くなった人びとの慰霊のため造船業を営む開基、神原秀夫によって1965年に創建された。建築祭の展示が行われる「無明院」は、境内奥の丘の上に位置する神勝寺の本堂で、前庭は作庭家・中根金作による「無明の庭」、「阿弥陀三尊の庭」、「羅漢の庭」と名付けられた広大な枯山水庭園となっている。また、白隠禅師の禅画・墨跡のコレクションを展示・公開する荘厳堂も併設されている。『ひろしま国際建築祭 2025』では、無明院のピロティ空間に用意された特設会場『NEXT ARCHITECTURE | 「建築」でつなぐ新しい未来』の展示を、茶室「明々軒」では、『神原・ツネイシ文化財団 建築文化再興プロジェクト「成城の家」の写し—丹下健三自邸の再現・予告展』の展示を行った。



会場の特徴

赤松に囲まれた瀬戸内の自然の中に、本堂、国際禅道場、茶室などの歴史的建造物や現代建築が点在し、庭園を楽しみながら、座禅、写経のほか、墨跡、現代アートの鑑賞ができる。境内の入口となる総樺造りの総門は、かつて京都の旧・賀陽宮邸(かやのみやてい)にあったものを1967年に開基が譲り受け当地に移築したもの。総門をくぐると、中根庭園研究所が手がけた池泉回遊式庭園の賞心庭を囲むように、浴室、含空院などが配置されている。なかでも特筆すべきは2つの現代建築で、寺務所である〈松堂〉(2014年完成)は建築家・建築史家として活躍する藤森照信氏の設計で、屋根の上には松の木が植えられている。また〈洗庭〉(2016年完成)は世界的に活躍する彫刻家・名和晃平氏とクリエイティブプラットフォーム〈SANDWICH〉の建築作品で、やわらかな曲線で構成される長さ約45mの舟をイメージしたスペースが、海原に見立てた錆石の庭の上に浮かぶように建っている。その内部空間は、アートと禅の世界が融合したインスタレーション空間になっている。

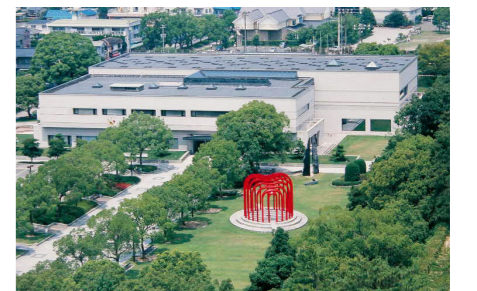
会場概要

住所： 広島県福山市沼隈町大字上山南 91
TEL： 084-988-1111
展示時間： 9:00-16:00
(寺院自体の最終受付は16:30まで。閉門は17:00)
会期中は無休
公式HP： <https://szmg.jp/>

※施設・展示の観覧には『ひろしま国際建築祭 2025』鑑賞パスポートが必要

② ふくやま美術館 ギャラリー(福山市)

JR福山駅のすぐ目の前に福山城の天守がそびえるが、それはかつての福山城の敷地だった土地に駅がつくられたからである。現在はその福山城天守を中心とした場所が福山城公園となり、その公園内にある福山市立の美術館が〈ふくやま美術館〉である。福山市は、市民の要望に応えるべく1974年から福山市美術館(仮称)の調査委員会を設置、約15年にわたり準備を重ね、1988年11月に、福山市市制施行70周年記念事業として、この美術館が開館した。



写真提供：ふくやま観光コンベンション協会

会場の特徴

美術館は、佐藤総合計画の設計。オーディトリウム設計の第一人者として知られる建築家・佐藤武夫(1899-1972)の佐藤武夫設計事務所を源流とする組織設計事務所だ。低層2階建ての美術館ロビーには、大きな窓とソファが用意された空間が設けられ、美しい公園越しに福山城の天守を望むことができる。同じ敷地内に建つ〈広島県立歴史博物館(ふくやま草戸千軒ミュージアム)〉(1989年開館)も佐藤総合計画の設計である。

会場概要

住所： 広島県福山市西町2丁目4-3
(福山城公園内)
TEL： 084-932-2345
展示時間： 9:30-17:00(入館は16:30まで)
月曜休館
(月曜が祭日の場合は火曜休館)
公式HP： <https://www.city.fukuyama.hiroshima.jp/site/fukuyama-museum/>

※施設・展示の観覧には『ひろしま国際建築祭 2025』鑑賞パスポートが必要

③ 尾道市立美術館（尾道市）

尾道の丘の上、千光寺公園内にある建築家・安藤忠雄氏が改修・増築設計を手がけた美術館。この会場では建築界のノーベル賞と言われる「プリツカー建築賞」を受賞した日本人建築家の魅力を探る展示『ナイン・ヴィジョンズ | 日本から世界へ 跳躍する9人の建築家 Nine Visions: Japanese Architects from Japan to the World』が開催された。「プリツカー建築賞」受賞の日本人建築家は、今やアメリカと並び8組（9名）と世界一の数を誇るが、それはなぜなのか。日本の建築家が世界でどう評価され、どのようにして世界レベルに達したのか、その魅力と真相を探る展示となった。

会場の特徴

設計：安藤忠雄 1980年開館（リニューアルオープン2003年）。尾道にある重要文化財「西郷寺本堂」を模した本瓦葺き寄棟屋根をもつ既存の美術館建物を、建築家・安藤忠雄氏が改修、さらに新館を増築して2003年にリニューアルした尾道市立の美術館。増築部分は庇（ひさし）をもったガラススクリーンの外壁の中に、ANDO建築の特徴である美しい打放しコンクリートでつくられた展示室が挿入される構成。これは安藤氏の代表作のひとつアメリカ・テキサス州にある〈フォートワース現代美術館〉（2002年開館）などでも試みられているもの。さらに増築部分と旧館、ガラススクリーンと展示室の隙間といった随所に「余白の空間」が与えられている。そこには坪庭のように緑が挿入され、来館者にとっての「隠れ家」のような場が用意されている。



会場概要

住所： 広島県尾道市西土堂町17-19
千光寺公園内
TEL： 0848-23-2281
展示時間：9:00-17:00
（入館は16:30まで）
月曜休館
（月曜が祭日の場合は火曜休館）
公式HP： <http://www.onomichi-museum.jp>

※施設・展示の観覧には
『ひろしま国際建築祭2025』
鑑賞パスポートが必要

④ ログ（尾道市）

尾道の千光寺山の中腹に位置するホテル〈LOG〉は1963年に建てられた鉄筋コンクリート造の集合住宅を改修し、2018年に開業した全6室のホテル。設計を手掛けたのはインドを拠点に活動する建築家ビジョイ・ジェイン氏が率いる〈スタジオ・ムンバイ〉で、『ひろしま国際建築祭2025』ではこの施設を舞台に、大阪のデザインスタジオ〈UMA / design farm〉が、ビジョイ氏の設計コンセプトやそれを具現化した尾道のスタッフの思いを聞き、その「カケラ」を拾い集めるという「建築との対話」を試みる体験型の展示が行われた。LOGの施設内にはカフェも併設されており、建築巡りの休憩スポットとして多くの人々が訪れた。

会場の特徴

設計：スタジオ・ムンバイ 2018年開業。〈LOG〉はLantern Onomichi Gardenの頭文字から取られたネーミングで、1963年に建てられた集合住宅をホテル、カフェ、ギャラリーにリノベーションした施設。改修の設計を手掛けたのはインド・ムンバイを拠点に活動する建築家ビジョイ・ジェイン氏率いる〈スタジオ・ムンバイ〉。彼らが計画の拠り所としたのは、〈LOG〉のすぐ近くにある小説家・志賀直哉が『暗夜行路』を練った長屋（志賀直哉の旧居）と同じ高さに位置するこの地からの風景だった。志賀直哉が見たであろう尾道と、ビジョイ・ジェイン氏を惹き付けた小津安二郎監督の映画『東京物語』での尾道の風景の追体験をコンセプトとし、海側と山側の土地を繋ぐことに力が注がれた。1、2階は住戸の壁を取払い、海側、山側の庭をつなぐピロティ空間を創出。周囲にカフェやギャラリーを配置した。3階部分は6室の客室と宿泊者専用のライブラリーとなっている。縁側を持つ客室は、和紙職人ハタノワタル氏による、床までも和紙が貼られた内装で、繭をイメージしたやさしくつつまれるような空間となっている。



会場概要

住所： 広島県尾道市東土堂町11-12
TEL： 0848-24-6669
展示時間：展示時間11:00-17:00
無休
公式HP： <https://l-og.jp/>

※「鑑賞パスポート」での見学は、1階及び2階のオープンエリア限定だが、特典として、宿泊者専用2階ギャラリーの公開（14:00-17:00）も行われた。
※1階オープンスペースでは、鑑賞パスポートを購入せずに自由に観覧できる展示を実施した。 <https://l-og.jp/>

⑤ LLOVE HOUSE ONOMICHI（尾道市）

千光寺公園に上がる尾道の丘の中腹にあるホテル〈LOG〉の、階段を挟んでちょうど向かい側、かつて作家・志賀直哉が暮らした長屋に隣接して建つのが〈LLOVE HOUSE ONOMICHI〉だ。築110年の空き家に一目惚れした建築家・長坂常氏が自ら購入・リノベーションを行い、2022年に新たな文化交流拠点〈LLOVE HOUSE ONOMICHI〉として再生させた。普段はアーティストインレジデンスとして期間限定で公開され、不定期で国内外のクリエイターが建築やデザイン、アートに関する展示を行っている。

会場の特徴

設計：長坂常 / スキーマ建築計画 2022年改修。交通の要衝として栄えた尾道で、かつて商人が接待のために山の手に建てた別荘「茶園」。そのひとつである築110年の日本家屋をリノベーションした施設。「尾道水道を一望できる開口部」「庭に大きく開く縁側」「座敷の付書院」などの魅力的な空間や細部はそのまま残り改修を行った。建築家の長坂常氏は、「展示にも使いやすいように、“建築家の気配”を極力出さずニュートラルな状態を保ちながら、傷んだ柱や壁、水まわり設備など、不具合のある部分や生活に不自由な部分に絞って修繕を施した」と語っている。尾道の風景とつながると同時に世界中のクリエイションともつながる場所となっている。



会場概要

住所： 広島県尾道市東土堂町8-28
TEL： なし
展示時間：10/4（土）～10/13（月・祝）、
11/22（土）～11/30（日）
10:00-17:00（最終入場16:30）
展示期間中は無休
公式HP： <https://lovehouse.org/>

※施設・展示の観覧には
『ひろしま国際建築祭2025』
鑑賞パスポートが必要

⑥ まちなか文化交流館「Bank」（尾道市）

尾道の商店街（本通り商店街）の中心部に建つ文化施設。元は旧・三井住友銀行尾道支店だった建物を改修し、2023年5月にオープンした。市民の文化活動の発表の場として、また尾道を訪れる観光客に尾道の歴史や文化などの魅力を伝える場として活用されている。建物は尾道市の重要文化財に指定されている。

会場の特徴

かねてから交通の要所として、また商都として栄えた尾道には明治時代になると住友銀行が設けられた。当時、住友家にとって尾道は、大阪市の住友本店と別子銅山（愛媛県新居浜市）との中継地点として重要な場所だったからだ。現在、〈まちなか文化交流館「Bank」〉となっている建物は、尾道では二代目の住友銀行の建物で1938年（昭和13年）に建てられた。設計は日建設計（住友系）の源流である長谷部竹腰建築事務所によるもの。ちなみに初代の尾道支店もこの建物から歩いて行ける場所（尾道市久保1-10-3）に現存する。こちらは1904年（明治37年）の完成で、住友本店臨時建築部の技師長だった野口孫市の設計によるものだ。



会場概要

住所： 広島県尾道市土堂1-8-3
TEL： TEL：0848-38-1911
（まちなか文化交流館「Bank」）
0848-20-7514
（尾道市企画財政部文化振興課）
展示時間：10月4日（土）～11月3日（月・祝）
10:00-18:00
水曜休館
公式HP： <https://www.city.onomichi.hiroshima.jp/soshiki/7/62836.html>

※展示の観覧には
『ひろしま国際建築祭2025』
鑑賞パスポートが必要

オノミチ・ユーツー

⑦ ONOMICHI U2 (尾道市)

1943年(昭和18年)に建てられた海運倉庫を、ホテル、レストラン、ベーカリー、カフェなどが入る複合施設に改修したのが〈ONOMICHI U2〉。U2というネーミングはこの倉庫の正式名称〈県営上屋2号倉庫〉の上屋の頭文字Uと2号倉庫の数字から付けられたもの。かつては人通りが少なかったJR尾道駅西側にある港湾地域が、この複合施設ができたことで人の流れが変わり、エリアが活性化された。この会場では、若手建築家が自ら制作した雑誌やヴィジュアル「ZINE」(Magazineのzineから取られた自主制作本)の展示・販売が行われた。

会場の特徴

設計：谷尻誠 + 吉田愛 / サポーズデザインオフィス 2014年開業。太平洋戦争中の1943年(昭和18年)に建てられた海運倉庫を、広島・東京を拠点に活動する広島出身の建築家、谷尻誠氏と吉田愛氏がリノベーションした施設。歴史的建造物ゆえに躯体には手を加えず、また将来的には現状復帰の可能性もあるという条件の中で、彼らが提案したのが「建築内建築」というコンセプトだった。解体が容易な軽量鉄骨を用いて尾道の街並のような「小さなスケールの連続と路地」をつくり、そこに様々な機能を持つスペースを配して利用者同士はもちろんのこと、尾道に住む人たちの出会いや関わりを促すよう設計されている。使用されている素材は「素朴さの中の洗練」というテーマに基づき、尾道の古い街から引用した木、石、モルタル、造船の街でもある尾道に因んだ鉄。照明などの細部やファブリックまでも地元で因んだものを用い、「瀬戸内」を体験できる空間を目指しデザインされている。



会場概要

住所： 広島県尾道市西御所町5-11
TEL： 0848-21-0550 (HOTEL CYCLE)
展示時間：10:00-17:00
無休
公式HP：<https://onomichi-u2.com/>

※この展示は「鑑賞パスポート」
購入なしで観覧できる
無料プログラム



展示内容

展示は『ひろしま国際建築祭 2025』の総合テーマである「つなぐ——「建築」で感じる、私たちの“新しい未来”
Architecture: A New Stance for Tomorrow」を踏まえて企画・計画され、福山市・尾道市の会場を合わせ、8つの展示が行われた。

① NEXT ARCHITECTURE | 「建築」でつなぐ新しい未来

『ひろしま国際建築祭 2025』のテーマ「つなぐ——「建築」で感じる、私たちの“新しい未来”」に呼应し、未来を担う5組の建築家がそれぞれの視点から新たなヴィジョンを提示する試み。現代の建築家たちは、建築を近代が追い求めた人工的な装置としてではなく、地球と響き合う有機的な存在として捉え直している。この展示では、「海」「風景」「自然」「宇宙」「市民」の5つの視点から構想された5つの提案を行い、環境と社会の新たな結びつきを探り、建築がいかにして私たちの未来を形づくるかを問いかけた。

〈企画概要〉

展示期間：2025年10月5日（日）～2025年11月30日（日）

会場：神勝寺 禅と庭のミュージアム（無明院下・特設会場）

主催：神原・ツネイシ文化財団

出展建築家：藤本壮介、石上純也、川島範久、Clouds Architecture Office、VUILD/ 秋吉浩気

協賛：浅沼組、ひろぎんホールディングス、ちゅうぎんフィナンシャルグループ、三井住友銀行

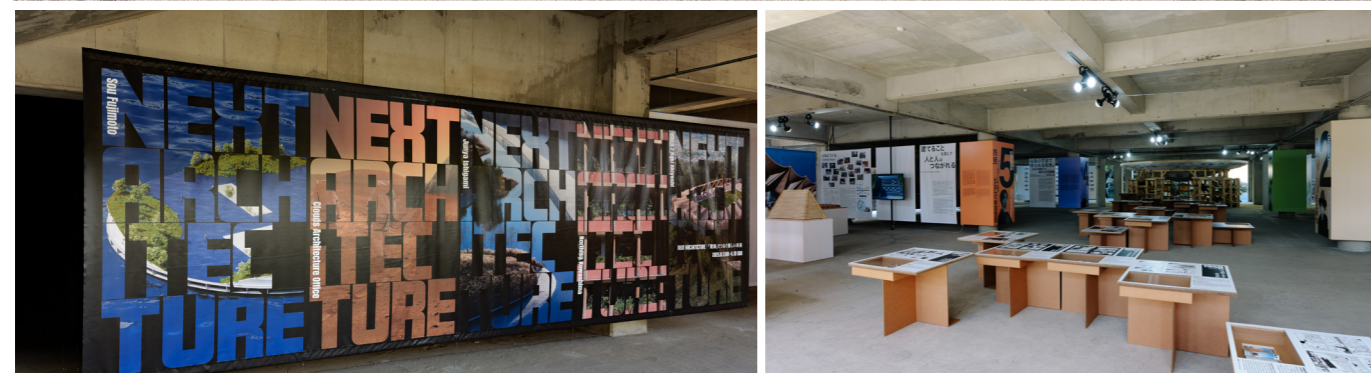
特別協力：京都大学大学院工学研究科建築学専攻 建築史学 ダニエル研究室

広島工業大学環境学部建築デザイン学科 杉田宗研究室、近畿大学工学部建築学科システム工学研究科 藤田慎之輔研究室

吉野銘木製造販売、トリスミ集成材、セイシヨク、ブランコ、タカムラ産業、みづま工房

展示デザイン：谷川公朗

アートディレクション：小熊千佳子



② 神原・ツネイシ文化財団 建築文化再興プロジェクト 「成城の家」の写し——丹下健三自邸の再現・予告展

戦後日本の建築界をリードしてきた建築家・丹下健三が、東京・成城に自邸として設計した住居があった（1953年竣工。現存せず）。その伝説的な住居を、瀬戸内海を見下ろす福山市内の丘の上に再現するプロジェクトが進行中だ。この展示では、宮大工が制作した縮尺1/3模型と共に、丹下健三がこの住居のためにデザインした家具や当時の様子を伝える資料類を展示しながら、「過去」の自邸の姿、そして近い将来実現する「未来」の姿を紹介した。

〈企画概要〉

展示期間：2025年10月5日（日）～2025年11月30日（日）

会場：神勝寺 禅と庭のミュージアム（無明院・明々軒）

主催：神原・ツネイシ文化財団

出展建築家：丹下健三

協賛：中国新聞社、エフピコ

特別協力：内田道子、溝口至亮（GALLERY-SIGN）、TANGE 建築都市設計、おだわら名工舎

展示デザイン：谷川公朗

アートディレクション：小熊千佳子



③ 後山山荘（旧・^{あいぜんそう}藹然荘）の100年とその次へ | 福山が生んだ建築家・藤井厚二

「藹然荘」（竣工年不詳）は、福山の豪商「くろがねや」12代当主・藤井与一右衛門が鞆の浦に構えた別邸。1932年頃、弟で建築家の藤井厚二の自邸（聴竹居）の写しといえるサンプールームを増築したと考えられている。しかし長らく人々に忘れられ、77年後に崩壊した姿で発見され、2013年には〈後山山荘〉（改修・設計／前田圭介）の名で、多くの協力者により再生され、現在では多目的に活用されている。本展では、福山が生んだ建築家・藤井厚二の建築をめぐる100年の物語を展示した。

〈企画概要〉

展示期間：2025年10月4日（土）～2025年11月30日（日）

会場：ふくやま美術館 ギャラリー

主催：神原・ツネイシ文化財団

出展建築家：藤井厚二、前田圭介

協賛：光和物産、ベッセルグループ、大和建设、タカムラ産業、プランコ

特別協力：谷藤史彦、藤井英博、松隈章、後山山荘倶楽部、竹中工務店、聴竹居倶楽部、諏佐遙也（ZOUZUO MODEL）

企画監修・会場構成：前田圭介（UID）

イラスト：宮沢 洋（BUNGA NET）

アートディレクション：榎原健祐（Iroha Design）



④ ナイン・ヴィジョンズ | 日本から世界へ 跳躍する9人の建築家

建築界のノーベル賞と言われる「プリツカー建築賞」を受賞した日本の建築家に焦点を当てる企画展示。「プリツカー建築賞」受賞の日本人建築家は、アメリカと並び8組9人と、世界一の受賞者数を誇る。では、なぜ日本の建築家は世界で評価され、どのようにして世界レベルに達したのか。その魅力と真相に迫る展示を行った。

〈企画概要〉

展示期間：2025年10月4日（土）～2025年11月30日（日）

会場：尾道市立美術館

主催：ナイン・ヴィジョンズ展実行委員会（尾道市立美術館、神原・ツネシ文化財団、中国新聞備後本社）

出展建築家：丹下健三（1987年受賞）、槇文彦（1993年受賞）、安藤忠雄（1995年受賞）、妹島和世・西沢立衛 [SANAA]（2010年受賞）、伊東豊雄（2013年受賞）、坂茂（2014年受賞）、磯崎新（2019年受賞）、山本理顕（2024年受賞）

協賛：常石グループ

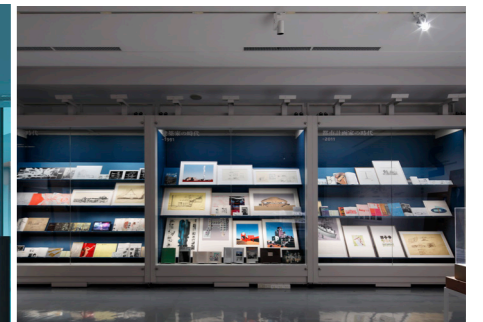
特別協力：千葉工業大学建築学科 今村創平研究室、京都大学大学院工学研究科建築学専攻 建築史学 ダニエル研究室、京都工芸繊維大学 KYOTO Design Lab、マルニ木工、アイティーエル、

展示デザイン：香村翼（香村デザイン室）

照明：高橋典子（灯工舎）

ハイアット財団コーディネーション：吉田実香、デイヴィッド・G・インパー

アートディレクション：榎原健祐（Iroha Design）



㊄ うつすからだ、うつしの建築

尾道には、国宝や重要文化財に指定されている古建築から、最新の現代建築、あるいは名もなき建物まで。街の日常生活の中に様々な時代の建築が溶け込んでいる。写真家・高野ユリカはなかでも「うつし」の建築に焦点を当て、浄土寺や茶園・爽籟軒など、写真と映像で、尾道の建築をみずみずしく写し出す。かつて尾道で生活していた人たちの視線を倣い、ここからまた100年先に向けて「うつし」していくように。私たち自身が「うつす」からだとなって、尾道の建築の語りを試みる展示となった。

〈企画概要〉

展示期間：2025年10月4日（土）～2025年11月3日（月・祝）

会場：まちなか文化交流館「Bank」

主催：神原・ツネイシ文化財団

出展作家：高野ユリカ（写真家）

協力：尾道市

特別協力：富士フィルムイメージングシステムズ、タテイン広美社

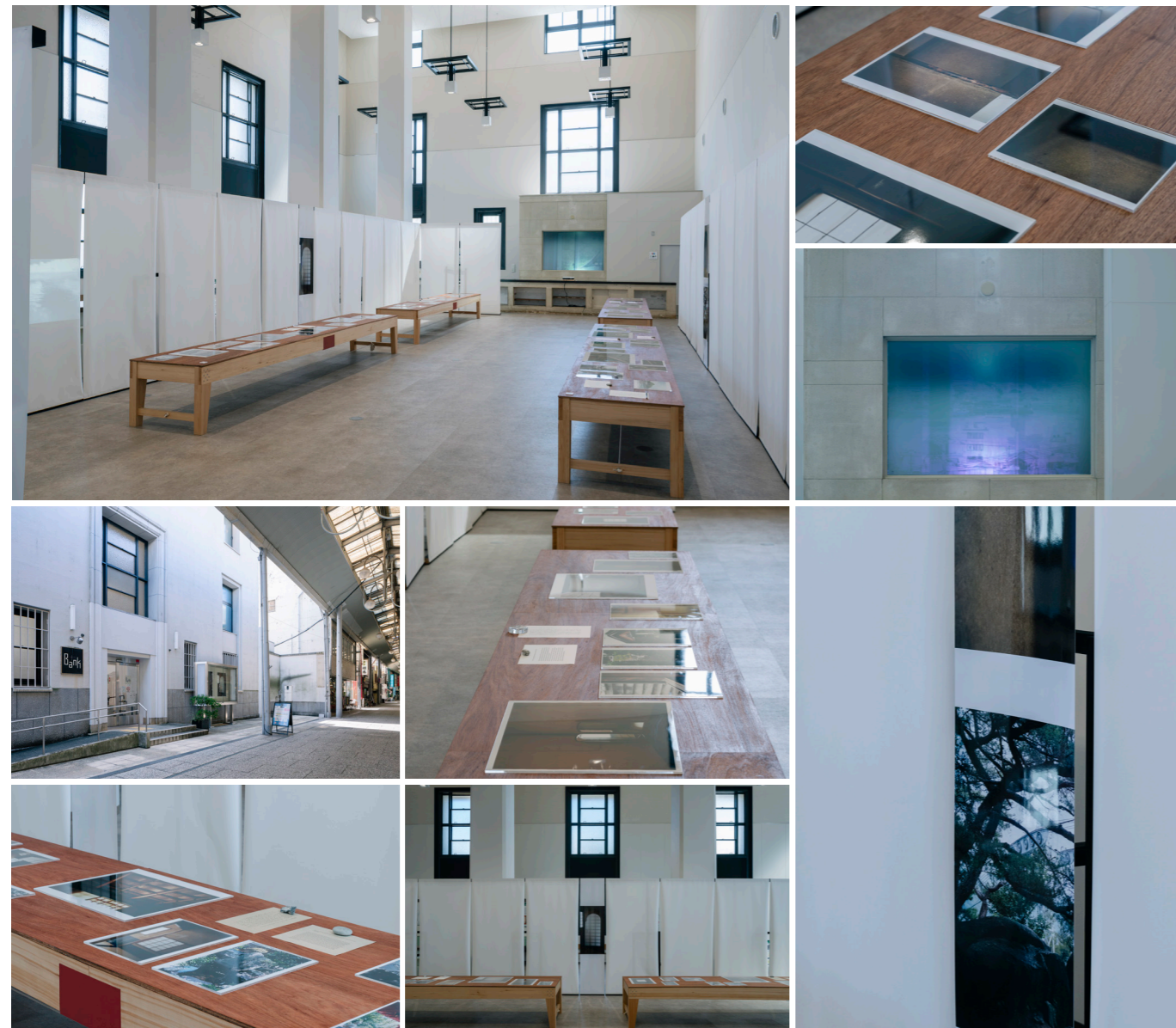
会場構成：大村高広

アートディレクション：本庄浩剛

映像演出：大高隆則

構造設計：木村友美

撮影場所：浄土寺、西國寺、旧土堂小学校、林芙美子記念館、明喜庵（豪商・橋本家別邸内「待庵」うつし）



㊄ 「ZINE」から見る日本建築の Now and Then

「ZINE」とはMAGAZINEの「ZINE」から取られた言葉で、自主制作の雑誌や、紙に印刷した自主制作のヴィジュアルブックを指す。この展示では京都を拠点に活動する〈けんちくセンター CoAK（主宰：川勝真一）〉のキュレーションで、日本の若手建築家がつくった「ZINE」や希少な建築系のヴィジュアルブックを集めて展示・一部販売も行った。

〈企画概要〉

展示期間：2025年10月4日（土）～2025年11月30日（日）

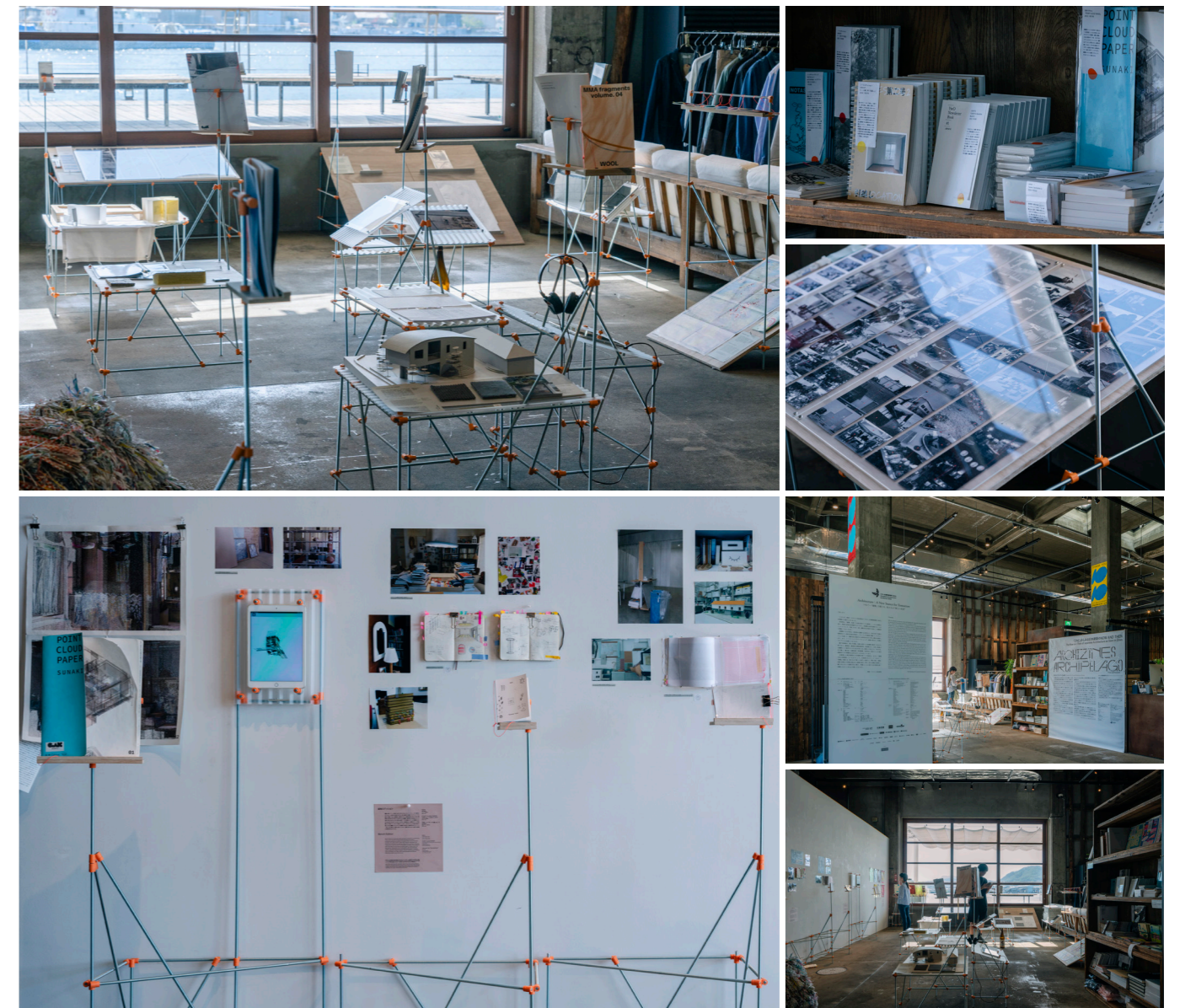
会場：ONOMICHI U2

主催：神原・ツネイシ文化財団

出展者：けんちくセンター CoAK

展示デザイン：中田雅実（studio basket）

アートディレクション：大槻智央（Myaku LLC）



移動型キオスク ― 小さな建築プロジェクト

普段、「建築」や「建築文化」を意識せずにいる人に向けて、建築祭と日常生活をつなぐタッチポイントとなるべく計画されたのが、「移動型キオスク―小さな建築プロジェクト」である。駅前や港沿いの広場といった人々がよく集まる場所に設置し、鑑賞パスポートを購入せずとも無料で「建築」と触れ合い、建築と人間の良き関係構築を想定し構想された。特に小学生～高校生といった若い世代に向けてのプロジェクトで、その設計・建築費用は、地元企業の協賛で賄われた。また、キオスクは移動や解体・組み立てが容易にできることを念頭に設計されており、次回以降の建築祭でも再び活用される計画である。

移動型キオスク―小さな建築プロジェクト 01：「つぼや」

堀部安嗣×ウッドワン

建築祭の会場のひとつである広島県福山市の〈神勝寺 禅と庭のミュージアム〉にある、作庭家・中根金作による枯山水「無明の庭」に設置。普段は立ち入ることができない庭の中に期間限定で登場し、神勝寺本堂から見る「一幅の画」として、視覚的にも体験的にも心に刻まれる建築となった。「木の文化」の継承者であるウッドワンの哲学を反映しながら、日本の伝統的な手刻み大工技術を用い、羽根建築工房が吉野檜無垢材による小屋を組み上げた。

〈企画概要〉

展示期間：2025年10月5日（日）～2025年11月30日（日）
 会場：神勝寺 禅と庭のミュージアム（無明院・無明の庭）
 設計：堀部安嗣
 協賛：ウッドワン
 協力：羽根建築工房

移動型キオスク―小さな建築プロジェクト 02：「風景が通り抜けるキオスク(Catch)」

中山英之×モルテン

建築祭の会場のひとつである広島県尾道市の〈ONOMICHI U2〉に隣接するウォーターフロントの木製デッキの空間、オリーブ広場に設置したキオスク。半透明な膜材の2つの小さな建築による“風景が通り抜ける”キオスクとなっている。2つの建築の蓋をあけるとそれが屋根になり、このキオスクを拠点や舞台に、子供向けのワークショップをはじめとしたイベントが複数回行われた。

〈企画概要〉

展示期間：2025年10月5日（日）～2025年11月30日（日）
 会場：ONOMICHI U2 前「オリーブ広場」
 設計：中山英之
 協賛：モルテン

移動型キオスク―小さな建築プロジェクト 03：「雲がおりる」

石上純也×常石造船・ツネイシカムテックス

『ひろしま国際建築祭 2025』の玄関口となる山陽新幹線 JR 福山駅南口に設置されたキオスクで、インフォメーションセンターとして情報発信や来訪者の交流を促した。設計者である建築家・石上純也氏は、常石造船の工場を見学した際、鋼板を三次元に曲げながら溶接し巨大な船を組み立てていくその迫力に圧倒された。このキオスクでは、船を作るように鋼板を三次元に曲げ溶接し、ちょうど船を横に傾けたような状態で設置した。設置のバランスはおきあがりこぼしの原理で、足元を重くすることで成り立たせている。倒れるか倒れないかギリギリの感覚で地面に設置している風景は、まるで雲が優しく陸を触るかのような感覚を想起させる。

〈企画概要〉

展示期間：2025年10月9日（木）～2025年11月30日（日）
 会場：JR 福山駅南口
 設計：石上純也
 協賛：常石造船、ツネイシカムテックス



